る。しかし之によつてスタインの遺業はペルツ及びベーメルの二人の提携統率の下に繼紹され、まず〳〵進行したのである。初めかの發會式に參列した聯邦使節である總務部の一人は、當時、この事業の完成には十年乃至二十年を要すと見込むだのであつたが、それは非常な空想であつて、百年後の今日も尙ほ依然繼續してゐる。この長き史料編纂事業は、かの前に述べたイタリアのムラトリやフランスのベネヂクチン學僧の物したものより

も一層廣汎に、徹底的に、模範的に遂行され、史學研究法の所謂史料分析（Quellenanalyse）及び史料學の補助法たる古文書綜覽目錄（Regesta）の龜鑑を垂れてゐる。

1 Neues Archiv der Gesellschaft für ältere deutsche Geschichtskunde Bd XXXXII:
Geschichte der M. G. H. bearbeitet von H. Bresslau, Hannover, 1921.

2 Seeley, Life of Stein and his Times, Cambridge, vol III, pp. 361
Briefe Goethes, Weimar ausgabe. XXXII ss. 45. No. 31.

頼山陽の半面

北村壽四郎

一

彦根の儒員であつた中川漁村と醫師の久米道仲とが共に頼山陽の門に入つた關係や、家老の小野田小一郎と山陽との間に結ばれた親交から、山陽は屢彦根に來遊することになつて、未だ世に知ら

れて居ない事蹟が傳はつて居るから、山陽傳記の補遺として紹介したい。就ては先づ漁村の事蹟から略記する。

漁村は彦根藩士小原君雄の長男で、祖父を幽桂といつた。幽桂は通稱嘉藏、名は維寧といつた。傳癖と評された程左傳に精通し、左氏直解の著がある。君雄は彦根の國學者大菅中養父に國學和歌を學び、藩主井伊直中より學資を給與されて伊勢に行き、本居宣長の門に入つて國典を講究し、頗る宣長の推奬を得て歸藩し、寛政十一年藩の學校稽古館を創立したとき、和學教授に任用されて本居派の國學を弘布した。漁村は寛政八年三月九日に生れたが、祖父はこれに祿郎と命名した。幼時既に麒麟兒の評があつて、初め父に和學を學ばんことを請うたが許されず、更に劍槍を學ばんとしたが又許れず。藩の儒員伴伯德西鄕路卿に從つて學業を修めた。識見秀拔であつて諸師をして嘆賞措かざらしめた。

父の弟中川勘解由は出でて近江愛知郡薩摩村なる善照寺の室老となつて居た。漁村は養はれて薩摩に行き、農夫莊次に就いて算術を學んで其技にも通じた。十七歳のとき京都に上り、後諸國を遍歷して、到る處で學士と交遊し、東は毛信を經て江戸に行き、南は紀州を極め、西は馬關に到つた一夕忽ち思ふに、文物寥々として天下何れも同然であるから、海を濟つて西するとも、觀る者がなからうと、終に九州に赴かずして歸途に就いた。京に入つて宿儒佐野山陰に謁して學ばんとしたが忽ち議が合はない爲めに慨然として去つた。時に年二十二の青年であつた。それより國に歸つて帷を垂れて子弟の教養に務め、門下より俊才が輩出した。

文政五年京都に上つて、始めて山陽に面會して作文の法を問ひ、經義を猪飼敬所に問ひ、論難數

次に及び、終に二翁の說に服して師事した。此年井伊直亮は漁村を召して儒員に加へんとしたが固辭した。後城南の平田村に月澤義社を起して子弟を敎導し、天保十二年直亮に召されて儒員となつた。弘化三年直弼は直亮の世子となり、漁村に修身治國の要を問ふたとき「芻蕘之言」と題する一篇を上つた。其書の文言凱切にして能く時弊に適中して居る。其中に

人君の御身は、自身儒生の如き讀書を勤め、經史群書を講究被遊候事は迚も難成、且は人君の御本意に被爲背候、

といへるが如く、徒に經籍に涉るを責めずして實用實行を先にし、其の讀むべき書目を撰むことを注意し、多くは之を近代の雜史又び德川氏以來の制度に取つてゐる。故に直弼は常に此書を左右し藩主となつてから後藩政を改革するにも、此書に據つて施設する所が多かつた。

漁村の學は普通の儒者とは其選を異にし、恒に經世に志し實用實行を工夫した。彼れは世の儒者を目して讀書生と呼んで居る。其講書は先人の學說を一步も踏み出づる能はざるが如き偏狹な說に拘泥せずして常識によつて解說し切實なる例證を擧げて痛快に講じたものであるから、學館に於ての講釋は何時も講堂が滿員であつた。漁村の高弟田中芹坡は學館の敎授になつた人で「漁村中川先生行狀」を書いた。其中に

先生爲人、磊落趺蕩、有笑癖、聲如鐘、酒間好談古英雄忠烈節慨之事、口角飛沫、頭沒机案、聽者忘倦、其讀書不區々于章句、務適大義爲要、經義不主一家、雅言曰、朱子說本、徂徠說末、學者治經、貴明體達用、何必墨守、其爲文章、豪放奇俊、類其爲人、其作詩、不規于格律、而言其所欲言、雖然腹笥之所溢、自然有可觀者矣云々、

嘉永三年十一月直亮が卒して直弼が藩主となつ

た時、漁村は侍讀を仰付つて、毎月三回魯論を講じた。同六年六月直弼は江戸から彦根に歸つて幾日も經ない内に、米國水師提督ペルリ渡來の急報に接し、幕府の諮問を受け、且出府の命を受けた當時藩臣を會して意見を諮詢したとき、皆攘夷を以て答へたが、獨り漁村は「籌邊或問」の一篇を上つて開國を主張した。其說く所直弼の意に適したから、群議を排して採用され、直弼は一篇の意見書を幕府に呈した。八月直弼に扈從して出府し、又々殿中に於て大論戰をしたが、採用されて、終に直弼は八月第二の意見書を上申して開國を主張した。漁村が八月廿一日彦根に居る澁谷驅太郎（如意山人のこと）へ此論戰の模樣を報じた一節に、

（前略）當藩より官へ御答出候、山鹿素行江川太郎左衞門杯の如く戰場實地の手覺もなき事を飾立候事御止め唯此擧第一施仁務德、撫困窮、士氣を一振し、海内一同忠憤に感激申候御仕立被遊候樣第一の上策、防禦之事は才能を擧げ、被任候段被仰立可然、毎度於君前激論仕置候而、御聞入被下置難有候、先可秘。右之外都下人情悔々痛哭の事多く候云々、（京都市谷靜也氏所藏）

同年十一月病氣にかゝり、暇を乞ひて彦根に歸り、「籠城退縮を救ふ論」の一篇を上申した。（漁村の開港論は是迄餘り發表されて居ないが、問題外に屬するから、別に記述する）翌安政元年十二月沒した年五十九、外交事件の益紛糾せんとする秋に當つて漁村の溘歿したのは最も痛惜に堪えない

二

文政五年漁村は賴山陽を京都木屋町の春臘樓に訪ひて其說に服し師弟の約を結んで文を學んだが其時の模樣を漁村隨筆に

余始謁賴山陽先生、先生時寓居于鴨河西畔木屋街、余偶微醉、先生引共登樓、指東山曰、欝々蒼々爲幾英雄所蹈盡、余曰、人果不可無功名也、明日復謁、先生擁爐閑

詩、使內子炙于背上、余笑曰、乃公亦知火攻乎、因談論終日、後東遊西行十數年、先生移居三本木山紫水明樓、恍如夢寤、內子舉三子、日月流邁、余甚悔費幾日月遊歷中也、

とある。時に漁村は年廿七であつた。漁村は父に似て大笑の癖があつて、如何なる人の前でも憚らず、且邊幅を飾らぬ風があつたから。山陽に對しても思ふ存分に談論し、乃公亦火攻を知る乎とやつて雷の如く大笑した所など、彼れが性行が卒直に顯れて面白い。第二の訪問は天保元年であつた此時は山陽に從つて祇園の金葉樓に遊んで一日の清遊を盡し、夜陰又山陽の宅を訪ねた。此清遊の狀を漁村隨筆に

余遊京師、從山陽先生、飲於東山金葉樓、兒玉士敬亦至、歡飲終日、夜半送歸水西莊、又乘燭盡餘歡、翁有詩贈余曰、牛王廟畔落梅花、惜別傳盃見暮鴉、月色水聲離未得、帶將醉到吾家、明日翁招飲三樹水樓、憑欄指東山謂余曰、東山一帶如琵琶湖波塘、是近江之險、非山城之險也、余曰、然如函關、非八洲之險、而關西之險耳、翁大笑、酒酣翁揮毫、二妓磨墨了懸奉紙、嗚呼斯遊可復得哉、

と書いて居る。兒玉は山陽の門下生である。

三

久米道仲は通稱純太、字は賈、牀山と號し、彥根の町醫者である。夙に山陽の門に入つて經書詩文を學び、山陽彥根來遊のときには道仲の湖亭に遊び宿泊して、其交情は餘程濃かであつた。其頃彥根の家老に小野田小一郎といつて豪放磊落な人があつた。本名爲典、字は舜卿、赤松と號し、兒宇津木兵庫久純は詩人で詩集の著述がある。大鹽平八郎を諫めて殺された宇津木矩之丞は其第二子で、詩人岡本黃石は第三子である。舜卿も亦詩を能くし藩主直中直亮に仕へて信任篤く、頗る勢力があつたので、發行の小野田、派利の小野田など、持囃

された人である。舜卿は京都に上つて山陽に面會せんと道仲に紹介を求めた。道仲之を山陽に通ずると、山陽は左の如き書簡を送つて其來遊を求めた

代吾御答

兼て御噂有之彦藩太夫今日午後御尋も可被下候旨承知仕候、何の差支も無之候、尤午前講書仕候故、八時過より後はいつにてもよろしく、七比より後に候へば最妙に候、其節は終日之課終酒にても飲候時刻故、御同醉仕、緩話仕候てよろしく、併御下戸に候や如何、何とも御計可申哉、先日御申入置候通、野人眞卒、頓と別之御あしらひは不仕候間、其積にて御入來候樣可被仰置下候、あなかしこ

三月八日　　襄　復

久米賈樣

（東京森氏所藏）

こゝに彦根太夫とあるは、小野田舜卿其人の事である。豪放な學者と家老の兩者。そこへ瓢逸な道仲が加つて酒間詩もあり歌もあつて相下らぬ豪談逸話も定めて多かつたであらう。其時の模樣は餘り傳らぬが、只舜卿が死んだ鮒の鱠を饗せられたのを見て山陽に、彦根へ來られよ、生きた鯉鮒の快味を饗せんと云つて來遊を勸めたとの話が遺つて居る丈である。舜卿が山陽を訪問したのは三月八日であるが、其年紀は明らかでない。從來山陽の彦根來遊が記錄に載つて居るのは唯天保三年五月の一回のみであるが、實は此時丈ではなかつた。山陽が舜卿に送つた詩に

君家籬落暗香通、依例敲門氷雪中、一剪割來春富貴、付吾手裏飲東風

といふのがある。依例敲門氷雪中の句によつても屢訪問したことが推斷されやう。且や天保三年の最後の來遊は五月であるから氷雪中とはいはれまい。猶ほ漁村が澁谷に送つた書簡中にも「石川和介阿部勢州儒臣右は賴門に面、先年賴に從ひ彦藩にも參候人也」云々と見える。

當時彦根には風流韻士が多かつた。藩主の直亮は詩人と云ふ程でなくとも、詩作を好んで城中で時々詩會の催しがあつた。諸士では儒員以外に一家老の木俣土佐を始めとして宇津木下總、西郷伊豫、三浦内膳、岡本半介(黄石)日下部内記などが居たから、文人壽家や韻士の來遊が多く、菊池五山、大窪詩佛も來れば、中島棕隱、猪飼敬所、梁川星巖なども來つて時々詩酒の會が開かれ、殊に星巖の如きは、木俣から扶持を貰つて、松原村にある木俣の下屋敷に三年も滯在して居た程であるから、山陽も屐杖を曳いたのである。

舜卿が書齋の命名を求めたとき、山陽は簡の一字を其扁額に揮毫し、又求めに應じて簡齋記を書いて、其謝禮に金百兩を貰ひ、豪放な山陽も、流石に大藩の太夫であると大に敬服して、爾後舜卿の言ふことは何でも能く聽入れたとの話が傳つて居る。

四

道仲は山陽に書讃を求めて、其謝禮に彦根牛肉を贈らうと申入れたとき山陽がそれを斷つた手紙がある。

來早春年禮も理可申義に候、
梅看なども止に可仕候、
先日之書贊は御用に相立候て喜び申候、牛肉を御禮に可被下旨被仰候へども、此節爲君服心喪居候、大切之品御心配被下候上にては殘心に候間、御用捨可被下候、御近所之良則蒸菓子にても、其代に被賜候はゞ、佐茶可申候
小野田よりも毎々魚など被下候、當臘中は先精進仕候間、御序にそと被仰遣置可被下候、村雨手製可被贈旨先比噂御座候て、謙退にて相止申候、それ杯所望に候大笑、
十二月六日　山陽
久米賈樣

（神戸市人見米次郎氏藏）

文中に小野田とあるは舜卿のことである。御近所の直則蒸菓子とあるから、道仲は此時京都蛸藥師堺町龜屋直則の附近に居たと見える。山陽は淺野家の仕を辭して京都に移つた爲めに、多少世評はあつたけれども、舊君の逝去に逢つて、心喪に服して肉類をたち精進したのは、流石に學者の態度を失つて居ない。山陽は故國を去つたものゝ常に安んぜぬ所があつたことは、嚴山子文冢銘で知られる。嚴山は彥根の足輕村田某の子で、藝藩淺野家の儒臣堀杏庵の末裔に當る君弼に養はれて子となり、山陽に師事したが、間もなく沒した。天保二年彥根の學友橫田敏、西澤保美、澁谷昭、古田芳久等は嚴山の爲めに其文稿退筆を城南の長久寺に埋めて碑石を建て山陽自筆の文を刻した。其文中に

余常傷無以報父母國、得子德大喜、相勉以實學、子德益發憤、誓振家聲供國用云々、

とある。子德は嚴山の字である。山陽遺稿には嚴山を彥根藩士直壁氏の子とするが、長久寺にある銘文には、村田氏の子と見えるから村田の方が正しい。かゝる關係から山陽が彥根に來たときには村田家でも宿泊した。嚴山の父と兄とは文事のあつた人である。此銘文によつても、父母の國を離れたことに傷心して居ることが判る。數多ある山陽傳中に、山陽が父の爲めに三年の喪に服したことは書いてあるけれども、舊君の爲めに精進して心喪に服した事蹟の記述が缺けて居るが、此手紙は山陽の人格殊に其故君に對する心情を立證すべき有力なる資料である。

偖其舊君といふは從四位下少將淺野齊賢のことである。齊賢は享年五十八歲で天保元年十月廿一日に卒去した。此書簡は無年號ではあるが、筆蹟から云ふと晩のものであるから、齊賢に對する心喪であることが知られ、天保元年十二月六日に書

いたものと斷定することが出來る。

山陽が蒲柳の質であることを知つた道仲は、當時唯一の養生藥とした牛肉を贈つて强健の料に供せんとしたが、かゝる事情の爲めに斷られて見合せた。山陽は牛肉を穢れた食品として居たけれども、藥としては無上の品であることを慶彦根に來遊して聞きもし又食べもしたらうと思はれるから贈るものと贈られるものも左のみ不思議に思はなかつたであらう。次ぎの手紙を見ると、道仲が牛肉を贈つて、山陽が之を賞味して居たことが判る

牛肉めづらしく拜戴、早速賞味可仕候、是に付ても、令弟存出候事に候、卷舊作に丁度よろしき詩有之、錄申候、たしか貴家へ上候詩と覺申候、

詩と額は彼臨湖之家と被仰候方の分に候也、是は名を付るにては無之候哉、猶しかと御手帋にて被仰趣被下度候、度々承り候ても忘却奉煩候、御免被下候以上、

四　日　　頼　久太郎

久米純太樣　（神戸市人見米次郎氏所藏）

道仲の弟と山陽、それに牛肉が加はつて其間に何か消息があつたらしく思はれる。それから舊作に丁度よろしき詩があつて卷物に錄したとあるも牛肉に關したものらしい。

此書簡には只四日とのみあつて年月がないから何時頃のものか斷定仕難いが、筆跡は晩年のものである。兎に角山陽の牛肉食用は早くから始つたことで、天保元年や二年位のことではなかつた。道仲は醫師であつて、文政六七年頃から山陽の母梅颸とも歌づれとなり、山陽が體質を能く知つて居たから、牛肉の食用を勸めたものであらう。又山陽は父母の勸めによつて、常に灸を用ゐて、漁村に笑はれたこともあつた。漁村隨筆に左の如き記事がある。

頼山陽先生病中詩云、母在恐先死。天保壬辰五月、先生過訪草堂、歡飲終夕、時請南極星讃者、先生題曰、我聞福祿壽、三者皆在天、何年丹青手、併將壁間懸、

又五律結尾曰、水雲中共醉、此會復何年、先生以此年而沒、而母猶在、皆詩讖也、

水雲は漁村の水雲茅舍をいつたもので、山陽の孝心常に母に先んぜんことを恐れて、養生藥とは云へ、當時一般に穢れた食品として嫌忌した牛肉をさへ食して保健上に注意を拂ひつゝあつたのである。

牛肉は只養生の藥として用ゐたが、當時の事情から云ふと、元より四ツ足物は穢れたものとして其肉を室内で食すると室を穢し、神佛を穢すと云つて室外で食し、無論食器は別にした。食用してから十日間位は神佛の參拜や墓參を遠慮して、必要の場合は代參を出したものである。

元來彦根は元祿年代から牛肉の食用を始め。又牛肉を用ゐて製劑した反本丸(ヘンボウグワン)は彦根藩士花木家(元藩生氏鄕の家臣)の特製品であつて、廣く諸藩に賣捌きて婦女子の養生藥として用ゐた。肉牛は毛の褐色なるを最上として之を黃牛(アメウシ)又は赤牛といつた。藩主の用品、將軍御用諸大名の註文に對しては、一週間ばかり胡麻飼にして屠殺したから胡麻牛とも云つた。山陽が牛肉を指して大切の品と云つたのは、藩主の用ゐる胡麻牛の一部を貰ひ受けたからである、是等は他に憚る所あつて公然賣出すことは出來ず、又食用することも出來なかつたから、購入するにしても内々手蔓を求めて手に入れて、密に食用したものである。大抵醫師が仲介者となつて、名家の人々が食用して居た。肉は味噌漬にしたもので、美味なるばかりでなく、長く貯藏し、若くは遠方に送るに堪へた。夏季は薄く細長く切つて干牛肉にしたが、之を屠殺する部落では、サイボシ又はサヤボシと稱して居た。伊井直弼は佛法の信仰上、慈悲の念も深く領内に於ける牛の屠殺を禁止した。水戸の齊昭や一橋慶喜は牛肉好きであつたから、常に贈つて居たが、か

かる事情の爲めに屠殺を禁止した後は、其後送附も見合せることになつた。水戸と彦根との確執は之が原因だといふ説もあるが、もとより取るに足らぬ。攘夷論者から直彌に近江の赤牛といふ異名を呼んだのは全く此牛肉から起つたのである。

五

山陽は舜卿の招きに應じて彦根に行かんものと天保三年五月八日門弟關五郎を隨へ、京都を出發して大津に到つた。其時門弟牧善助が送つて一夜同宿し、九日早天山陽は舟中の人となり、善助は京都に歸つた。晝頃船は愛知郡薩摩村に着いて漁村を水雲茅舍に訪うと、漁村は嘗て牧善助に「先生及び吾子は僅に都下陳腐の魚味を知るのみ、湖中の鯉鱠は天下第一である、漁蓬荻蘆の中に環坐して師友と其味を上下する能はざるを恨む」といつて生きた鯉鱠の美味を説いたことがあつたが、此時鮒や鯉を鱠付鱠となし、或は煮或は汁にし、蓴菜の羹など皆師の好む所のものを用ゐて饗應した。山陽は蠶豆飯を最も珍味として喜んだ。此時山陽が滿悅の情は其詩に露れて居る。

湖岸認君家、日晡維我船、階除迎莞爾、花竹亦欣然、
玉屑膾鮮鯉、銀絲羹嫩蓴、交情何所似、戶外水如天、

又

卷心未展芭蕉葉、重瓣方開芍藥花、更有厨中蚕豆飯、
清和時節宿君家、

山陽は又漁村が妻女の案内で菜園に往つて蔬菜を摘み、漁村と共に川に往つて魚を漁するなど、都下では出來ない慰みに日を送つたが、生來性急な人とて、畑に行き川に漁するにも、言出したが最後、待て暫しがなかつたので、妻女などは隨分迷惑したとの話が遺つて居る。夜に入つて漁村の心盡しで師の爲めに求めた南彊繹史を閲覽に供した之につき漁村隨筆に左の如く書いてある。

先生之來也、余新買得南疆繹史、先生見奇之、就蓐披閱、到史可法傳、不堪悲感、嗚咽諷誦、挑燈徹曉、余與關五郎起坐待旦、先生平生倘篤慨出於天性、皆此類也、余門生有半十郎者、家頗富、請翻刻繹史、余請序於先生、先生大悅許諾、既而先生沒、半十郎尋沒噫、

山陽は風塵萬丈の都を離れて風光明媚な湖岸の田園に於て會心の漁村を訪ひ、快談放論しつゝ、鯉鮒の美味、蠶豆飯の珍味に舌鼓を打つたであらうが、南疆繹史は更に一段の好下物であつたらう終夜閲讀して悲感に堪へないで、嗚咽諷誦して曉を徹し、歸途舟中でも讀み、湖上大浪に逢つて船に沖島に避難して漁家に一泊したときにも亦閲讀した。此時の詩に、

泊於幾嶋

避風入湖嶋、繫舟蔭林樾、數家依厓住、汲路泥常滑、
上岸借一枕、舟中苦蚊蝨、淶句滯蕩城、紗帳申估畢、
不如漁父家、漁燈縷吾帙、

とある。山陽は又彦根や舟中で湖國名物の蚊軍の襲來に逢つて苦悶したが、島中では其憂ひがなく平然と繹史を快讀した揚句が此一律となつたのである。漁村が山陽に送つた書簡が漁村文稿中にある。

辱手教、具審沖島夜泊悽惋之狀、嶋距村數里而近、小舟破巨浪則一黑憩之間可到也、宛乎在水中央而徒費思企天也、所諭示五古詩湖中始有此作、嶋神亦好事、勞先生而以鳴、已悽絶、先生之不幸、湖中之多幸而已、芍藥一絶謹領大賜、草堂之榮極矣、南疆繹史二帙附呈

繹史は漁村が師の性行を知悉して選擇した書物丈あつて大に愛讀の光榮を得たのである。漁村の性行は又能く山陽に類する所があつた。書風の如きは最酷似して居る。故に南疆繹史の如きは啻に山陽の意に適したばかりでなく、漁村の性行に適したもので、半十郎の資金によつて翻刻を企劃したとき、漁村の序文は既に作つてあつたが、山陽の死にあつて其序文が得られず、半十郎の死によ

つて終に翻刻が出來なかつたのは頗る遺憾である漁村は三諫錄十卷を編輯して直弼の求めによつて一本を呈した。これ漁村が心血を注いだもので、恐らく南彊繹史に基いたものであらう。

山陽嘗て日本樂府一篇を著した。清國の吳錢泳之を得て感激し詩を作つて山陽に送つたが、其時は既に山陽の沒後であつた。之れを漁村隨筆には

山陽先生沒後、長崎譯吏傳致小屏風及詩卷一帖於其家蓋吳錢泳之所贈也。未亡人黎枝泣示余、其詩云

沈君蘋香嘗遊長崎島、於市中得日本樂府一冊、持以示、余爲題其後二首、

文敎敷東國、洋々播大風、傳來新樂府、實比李尤工、
謂李賀之尤西堂也　稽古聯珠璧、斟今攷異同、天朝未曾有、還擬質群公、
詩才眞妙婦、史筆表吾妻、日月無私照、風雲漸向西、
雄文標玉管、彩筆敵金閨、聞說扶桑近、高攀未可躋、

道光十二年十月廿四日　　句　吳錢泳

余按尤西堂有明史樂府、又舒位鐵庵著春秋樂府、近世史樂之盛、彼此一揆。

道光十二年は我が天保三年に當るから、錢泳の此詩を作つたときは、山陽は既に白玉樓上の人となつて居たのである。

六

山陽は嘗て漁村の爲めに中川祿郎名字說を書いたが、其末尾に左の如く云つて居る。

祿郎悅、請書其言、其鄉宜麥、麥吾所嗜、因欲以麥爲謝、余唉曰、昔陳壽索米於丁廙之子曰、當爲乃翁佳傳而不與爲、壽無其祿也、吾不求而得子之麥、吾有其祿也天也、烏乎不受、受而書此、

山陽が麥飯を嗜んで之を常用したのは亦體質の保健から起つたことであらう、これより漁村は其謝儀として麥を贈つたので、山陽の書簡、漁村の文中に麥に關したことが書いてある。天保元年に漁村は山陽兒玉士敬と共に金葉樓に遊んだ後、士敬は師の命を受けて漁村に麥の送付を請うた。其

返書が漁村文稿にある。

（前略）來書致翁意、厨吏訴涔沱河物料乏、祿郎急命春夫一日所得二斗、附舟便運送、湖上春來風波不常、所達遲速早晚、唯在於風后仁與不仁、一簡厚意、豈望報哉、他日有蕪萎亭之命而所不辭也、籠夫立門待書、不得書意、

山陽が水雲茅舍で快遊の後、六月二日村で漁村に送つた書簡は山陽が內事や嗜好を知られる珍らしいものである。

尙繹史讀候はゞ何處へ御返し可申哉、

御指圖可被下候、

此間發一書候、相達候否、家內申には麥切目に可相成と申候、五斗御越可被下候、貳斗はゞ先へ被下候てもよろしく候、代料は若書林へ被遣候もの御座候はゞ可被仰下候、直に書林へ何はゞにても償ひ可申候、繹史二帖舟中以來大氏讀了、日望他帖來、頭腦尤所望候也、彥根產の赤菜のくき漬、拙は所不好なれども、本國老人好候者あり、チト贈申度、少々被遣被下候はゞ可然候、又蚕豆儀莢可食者彼飯に可炊もの且又被下度、是は僕所嗜嗜、而京城無之候、

以上數頁饑食中條件よろしく賴候、頓首、

六月二日　襄

祿郎賢契

（彥根町廣野織藏氏所藏）

此書簡は山陽が六月十二日に喀血する十日前に書いたもので、麥の催促である。書中彥根產の赤菜のくき云々とあるのは、彥根附近の特產である赤蕪菁又は紅菁蕪と稱するもので、根も葉も共に漬けて食する。山陽は漁村の家で始めて蠶豆飯を食べたものらしく、其珍味が氣に入つて詩に詠じ更に蠶豆を求めて飯に炊かんとして所望したのである　併し文中に莢の食すべきものとあれども、蠶豆は莢を食せないから綠豆のことを云つたのであらうとの說がある。

山陽は種々な嗜好物があつたことを愛妓の幾松が知つて謠つたものに、

扨賴さんのおしものは、川魚に赤味噌葱小口切り、慈姑の丸だき、大根豆腐雲丹うるか、駱駝に瓢箪伊丹酒とある。漁村はよく賴家に往來して其嗜好に通じて居た。漁村隨筆に次の如く書いて居る。

山陽先生事々物々有一家風、酒必用伊丹村釀、不然則不飲、豉必用尾張製、世所謂赤豉者也、鳥肉必與豆腐雜烹、朝々必食餅、飯必雜麥、茶不好上品、濃煎中品、必有菓餌、甚好紅柿、常以爲下物、醉則歌平語二三曲揮毫則最愼落款、讀書則倚椅子、衣服雜器皆有一家風終身不變。

七

山陽は漁村の水雲茅舍に一宿して十日船を艤して彦根に向ひ湖上より彦根城を望み舜卿を懷ひ出でゝ

認得江城似畫圖、促搖雙櫓度長湖、洋々什倍黃河水、
竣我舜華好在無、

と詠じ、二挺の櫓を用ゐたから、船は走るが如く忽ち松原の湊に着いて舜卿が赤松園を訪うた。屢彦根に來たことがあるから知己は頗る多かつた。木俣土佐、庵原助右衞門、三浦内膳、宇津木對馬中島宗達（退隱して宗仙といつた）澁谷周平（叔明）などを訪ふたが、到る處詩酒の催しがあつて欵待された。木俣の爲めには筑後河長篇大幅を書き、舜卿の爲めには天草洋の横物大幅を書いたが、何れも傑作である。殊に三浦の爲めに絹地に赤糸を織込んだ罫引のものに詠史十五首を書いたものは山陽一代の傑作といふ定評がある。此時木俣の具足櫃に畫を書いた潤筆に金百兩を貰つて、流石の山陽も敬服したとの話がある。井伊家には山陽が詠史十二首を書いた屏風が一双傳つて居る。

山陽は其間琵琶湖に舟遊し、或は内湖に棹して快遊を恣にし、又は態星巖を京都から招いて共に遊び佐和山城墟にも登つて見た。澁谷周平は如意山人（谷鐵臣）の父で、醫師にして風流韻事を好み

山陽と最も親しく交り、旅行などするに費用を要する時は何時も周平に依頼したさうである。或時山陽は周平に此度は安書きをするからといつて周旋を依頼した。所が周平は困り果て菓子折を携へて山陽の家に至り「先生の書は自分の知人には殘りなく紹介したから周旋の餘地がない」と斷つたとの話がある。又或時は周旋した人々に「此度は御蔭で潤筆料が多分にあつたから絹地を持ち來れ御禮に書かん」と云つたが、絹地に金二分を要するので誰も依頼するものがなかつたとの話もあるされば彦根には山陽の書畫が頗る多く、又手紙の如きは殊の外多數に傳つて居たが、今は大半散佚して仕舞つた。（大正一三、五、三一）

歐米の古文書館（上）

文學博士　三浦周行

一　アルカイヴの本質

歐米諸國に於て史學の研究上に利用されて多大の寄與をなしつゝある諸機關の一つとしてアルカイヴ（archive）がある。此アルカイヴは我國に於て未だ其設けがなく、稀れにこれに類似するものがあつても、少數の關係者に獨占されて居るのは遺憾である。といつて、是迄とても一部の史家からは其設立の希望を發表されたこともあるが、私が先きにも歐米諸國に赴いて親しく視察した結果